

性欲支配レポート

こんにちは、山下です。

このレポートでは、
僕がオナ禁でエロやオナニーの、
支配から抜け出せたこと。

過去に性欲が強すぎることで苦しみ、
貴重な時間や若さを無駄にした話を、
していきたいと思います。

正直、人によっては、
気持ち悪いと感じるかもしれません。

引く可能性があります。

しかし、スケベなことばかり考えて、
色んなものを失った僕からすると、
エロにコントロールされるのが、
いかに危険なのかを、
あなたに分かって欲しいと思って、
全てさらけ出しています。

見ていて不快に感じる人が、
いるかもしれませんが、
承知の上で全部書いていきます。

では、始まりです。

目次

プロローグ：オナ禁で彼女が出来た -----	4
性欲に支配される高校生 -----	7
ぶっかかけにハマる気持ち悪い18歳 -----	13
シコシコダッシュで道を踏み外しそうになる -----	17
パンチラに対する執着心 -----	27
同級生のエッチでシコる童貞大学生 -----	31
モテないオナ猿が尻ハンターになる -----	40
熟女のケツと女子高生のヒップを比較する -----	51
トイレオナニー事件 3選 -----	59
オナニーとの決別 -----	80
オナ禁で性欲の支配から抜け出す -----	87
エピローグ：オナ禁の本質は性欲のコントロール ----	95
【追伸】 限定プレゼントのお知らせ -----	103

プロローグ：オナ禁で彼女が 出来た

オナ禁で20歳の彼女が出来た。

若くて性格が良くて可愛い。
社会人でお金を持っているOLさん。

そんな女性と付き合えて最高だった。

デートをすると楽しくて仕方なかった。

彼女と手を繋いで街を歩き、
カフェで何時間も雑談したり、
オシャレなお店で食事をしたり、
カラオケでデュエットしたり、
イチャイチャしながらお散歩したり、
海を見ながら語り合ったりして、

どこにでもいるカップルのように、
ラブラブな毎日を過ごした。

水族館、テーマパーク、
観覧車、プラネタリウム等の、
デートスポットに2人で行った。

好きな女子と一緒にいられるのは、
最高だった。

お泊まりデートをしたこともあった。

彼女の仕事の関係で、
1泊2日だったが、
色んな所に出掛けて、
素晴らしい思い出を作った。

付き合っ**て**しばらく経**っ**てから、
彼女とエッチをして童貞を卒業した。

22歳。

かなり遅い初体験だ。

でも、大好きな女の子と、
一つになれたのは、
すごく嬉しかった。

彼女の前で、
思わず泣いてしまうくらい喜んだ。

だが、過去の僕は違った。

性欲が高すぎるせいで、
常にエロいことばかり考えて、
女性をスケベな目でしか見れない、
オナニー男だった。

性欲に支配される高校生

初めてシコったのは高校3年生の夏だ。

風呂の中で人生初の射精を経験した。

「世の中にはこんなに、
気持ちの良い行為があったのか・・・！」

正直、ビックリした。

自分の下半身を手で上下運動するだけで、快感が得られる。

すぐに虜になった。

夏になる前は部活動をやっていたが、今は引退して暇だったので、
どんどんオナニーにハマっていった。

学校がある時は1日2~3回。
休日は1日中シコシコして、
多い時で4回とか5回出していた。

若かったので、
性欲は無尽蔵だった。

何度出してもまたしたくなって、
やめられなかった。

性欲が異常なまでに高くなった。

常にムラムラしていて、
シコリたくて仕方なかった。

性にも目覚めた。

最初は射精が気持ち良いだけだったが、
たまたま見かけたグラビア雑誌で、
女の子に興味を持った。

「可愛いなあ！こんな子とやりたい！」

直感で思った。

それからはスマホで、

エロ画像やエロ動画の存在を知り、オカズを使って抜くようになった。

さらなる性欲の上昇が起きた。

目はギラギラしていて、外出すると女性にしか目がいかなかった。

「抱きたい！ やりたい！ エッチがしたい！」

欲望が止まらなかった。

タイプの女子や、スタイルの良い女の子がいたら、すぐに気付き目に焼き付けて、

後でオカズにした。

「あの体を抱いてみたい・・・」

やりたくてやりたくて仕方なかった。
女性＝性の対象としか見れなかった。

誰でも良いからやらせて欲しいと、
心底思うくらい、
性欲に支配された状態だった。

僕は童貞だった。
エッチの経験は当然ない。

だから、性行為をしてみたかった。

普段からエロ動画を見ていたので、

流れは多少分かっていたが、
やってみたことがないので、
イマイチ分からなかった。

「女の子の中に挿入したら、
どんな感じなのかな・・・」

オナニーをするたびに、
妄想は止まらなかった。

一度で良いからやってみたかった。

女性を抱きたかった。

だけど、現実には全くモテないので、
シコシコする日々だった。

出しまくるとムラムラが強くなるので、
抜かないと落ち着かなくなかった。

頭はエロいことに99%支配されて、
常にエッチな妄想をしていた。

欲にまみれた男子だった。

ぶっかけにハマる気持ち悪い18歳

グラビア雑誌で性に目覚めてから、
僕はビキニを着た女性に対して、
とても興奮するようになった。

雑誌には可愛くてスタイルの良い、
ピチピチの女の子が写っていた。

まるで、汚れを知らない天使だった。

性欲が強い状態だったので、
彼女をグチャグチャにしたくなった。

おもむろにスボンとパンツをおろすと、
そのままシコシコして、
雑誌に向かって射精した。

最高に気持ち良かった。

雑誌に写る水着の女の子には、
大量の液体がかかっていた。

異常なくらい興奮した。

それからは「ぶっかけ」にハマっていった。

外出中や通学した時に女子を見かけたら、
チラチラ見ておいて自宅に帰り、
その子の水着姿をイメージして、
グラビア雑誌にぶっかけた。

言葉に出来ない気持ちになった。
感情はすごく高ぶった。

綺麗な女の子を汚したいという欲望が、
どんどん出てきた。

特に白いビキニを着た女性が写る雑誌は、
興奮が最大になった。

女の子の白い水着姿。

純白の天使だった。

そんなシミひとつないエンジェルを、
僕の液体でこれでもかと、
めちゃくちゃにしたかった。

・・・正直、自分で文章を書いている、
気持ち悪い男だと感じてしまった。

こんな高校生がモテるわけがないと思う。

オナニーやぶっかけに使うエネルギーを、
少しは別の物事に使えよと、
言いたくなってしまった。

しかし、性欲に支配されていたので、
気付けなかった。

シコシコダッシュで道を踏み 外しそうになる

暇な休日にスマホでオカズを探していたら、
シコシコダッシュの存在を知った。

シコシコダッシュとは、
外で見かける女性に突然ぶっかけて、
立ち去るという卑劣極まりない行為だ。

犯罪になるので、
絶対にやってはいけないことだ。

だが、性欲が強かった僕は、
一度だけ道を踏み外しそうになった。

それは夏の暑い日だった。

朝から数回シコった後、
用があったので外出した。

ショッピングモールの、
上の階に行きたかったので、
エレベーターに乗った。

途中の階で止まると大勢の人が乗ってきた。

集団の中に一際目立つギャルがいた。

服装がTシャツに、
ショートパンツだったので、
スタイルが丸わかりだった。

巨乳でスラッとしなやかな脚をしていて、

お尻はキュッと引き締まっていた。
年齢は20歳くらいに見えた。

高校生からしたらたまらない相手だろう。
年上のギャルだ。

やりたくて仕方なかった。

ギャルはちょうど僕の前に立っていた。

目の前にはナイスボディの、
派手な女の子がいた。

手を伸ばしたらお尻が揉めそうだった。

その時、
シコシコダッシュの存在を思い出した。

見知らぬ女性に、
いきなりぶっかけて立ち去る行為だ。

エレベーターの中なので、
男性が女性の背後にいても、
不審に思われない。

ギャルはスマホに夢中で、
僕が何かしても気付かない様子だった。

絶好の機会だった。

「シコシコダッシュをやってみたい」

欲望が止まらなかった。

年上のギャルを汚したいと思ってしまった。

エレベーターだから、
降りる階に合わせて出して、
速攻で逃げれば何とかなる。

無意識でそんなことを、
シュミレーションしていた。

いつの間にか右手が息子に伸びていた。

「もう我慢が出来ない・・・」

ズボンのチャックを下ろそうとした瞬間、

「待て！ダメだ！やめるんだ！」

理性が叫んだ。

はっと我に帰った。

自分が犯罪に、
手を染めようとしているのに気付いた。

このままではヤバイと思い、
途中の階で降りてトイレに直行した。

ギャルをオカズにして抜いた。

いつもより多くの液体が出た。

賢者タイムに突入した所で、
さっきの行動を反省した。

「僕は何をやっているんだ」

「お前は犯罪者になりたいのか？」

「女性を性の対象としてしか、
見れないのか？」

「バカやろう。頭を冷やせ」

何てアホなことを、
やろうとしていたんだと自分を責めた。

もしも理性が止めなかったら、
どうなっていたのかは分からない。

取り返しのつかないことに、
なっていたと思う。

ぎりぎりの場面でやめたが、
性犯罪に手を出す人は、
あそこでブレーキが、
踏めないんだらうなと感じた。

女性の気持ちを考えず、
欲望に身を任せた結果、
人生を破滅させてしまう人が、
世の中には沢山いる。

僕もその一員になる所だった。

ギャルに謝罪したくなった。

当たり前だがギャルだって人だ。
1人の女の子だ。

まだ20歳の女子が知らない人に、
いきなりぶっかけられるのは、

嫌な経験になるし傷つく。

なのに、女性の立場を考えないで、
自分の欲求を満たすことだけに、
目がいつていた。

そんな自分をすごく反省した。

どうしようもない男だと感じた。

女性を性的な目でしか見れなくて、
シコることばかり、
考えているからこうなるんだ。

根本的な原因は性欲の強さだ。

あまりにもムラムラがひどくて、

我慢が出来なかった。

発散する方法はオナニーだけだった。

出さないと落ち着かなかった。

平常心を保てなかった。

それくらい性欲にコントロールされて、
エロやオナニーにどっぷり浸かっていた。

まるで沼に沈んでいるようだった。

底が無くてどこまでも落ちていった。

這い上がることは不可能だった。

性欲に支配されるのは、

本当に危険だと感じた。

危うく道を踏み外しそうになった所で、

何とかこらえたが、
性欲に振り回される日々は続いた。

パンチラに対する執着心

学校に行ったら、
階段で同級生のパンツが見えた。

10代の女の子。
しかも、女子高生のパンツ。

興奮しないわけがなかった。

速攻でトイレに行きオナニーをした。
気持ち良くて仕方なかった。

彼女は白色のパンツを履いていた。

まだ、汚れを知らない10代の女子が、
真っ白の下着をつけていた。

想像しただけで、
息子が元気になった。

異常な興奮状態だった。

それからはパンツが見たくて、
わざと女子の後に階段を上るようになった。

特に可愛い同級生が階段を上る時は、
忍者のように気配を消して、
気付かれないように後ろを歩いた。

パンツが見えると精神が高ぶった。

オカズにしてシコった。

女子高生の生のパンツの破壊力は、
凄まじかった。

理性を吹き飛ばす威力があった。

女子のパンツを見ようと必死になった。

本当にバカだと思うが、
性欲に操られていたので、
正常な判断が出来なかった。

パンツを見てオナニーをするために、
貴重な時間や若さを浪費した。

とても、もったいなかったと思う。

高校時代はシコって終わった。

1~2年と3年の前半は楽しかったが、
後半でオナニーを覚えてからは、
暗黒の毎日になった。

シコるのが唯一の楽しみだった。

当然、モテなくて童貞だった。

同級生のエッチでシコる童貞 大学生

高校卒業後、大学に進学した。

生活は変わらなかった。
相変わらずオナニーを繰り返す毎日だった。

特に大変だったのが夏の電車内だ。

電車に乗ると、
露出しまくった女の子が沢山いた。

巨乳、細いウエスト、美脚、
引き締まったヒップ、綺麗な腕・・・

これでもかと女性達は、
自慢のボディをアピールした。

目のやり場に困った。

どこを見ても魅力的な女子がいた。

夏は暑いのでムラムラしやすいから、
シコる回数が他の季節よりも、
増えやすくなる。

その状況で、
スタイル抜群の女の子が視界に入ると、
オカズにしか見えなくなるので、
どうしても我慢出来ない時は、
途中下車してトイレで抜いた。

そうしないと性欲が爆発しそうだった。

手を出してしまうんじゃないかと思った。
危険な状態だった。

頭の中は高校時代と変わらず、
エロ一色だった。

常にスケベな目でしか異性を見れなかった。

女性は自分と同じ人間なのに、
性的対象でしかなかった。

大学生になっても、
性欲に支配される毎日が待っていた。

ある日、寮で女性を見かけた。

僕は大学の1~2年時に、

男子寮に住んでいたのだが、
異性の出入りは禁止だ。

家族ならまだしも、
若い女の子なんて絶対にダメだ。

見つかったら大変なことになる。

しかし、同級生のリア充が、
寮に女子を連れ込み、
隠れてエッチをしていた。

彼は隣の部屋だった。

薄い壁のため、
喘ぎ声が微妙に聞こえてきたので、
壁一枚を隔てて、
男女が裸で激しく、
絡み合っているのが分かった。

ちょうど僕は部屋にいた。

隣ではカップルの性行為が、
行われているのかと思うと、
興奮を抑えられなかった。

我慢が出来なかったので、
オナニーをしてしまった。

自分の腹に液体をぶちまけると、
虚しい気持ちになった。

「良いなあ・・・エッチ出来て」

「彼女欲しいなあ・・・」

自分と同級生の格差に絶望した。

彼には一緒にいてくれる女の子がいる。

愛し合える女性がいる。

僕には誰もいない。

女子には全くモテず、
右手とスマホとエロ動画が恋人だった。

孤独だった。

辛かった。

苦しかった。

ため息が止まらなかった。

これがモテる人間と、
モテない人間の差なんだと痛感した。

僕は確実にモテない側の人種だった。

後日、同級生がその時の様子を、
話している場面に出くわした。

彼は笑顔で彼女とのエッチの話をしていた。
本当に楽しそうだった。
心から気持ちの良い行為が出来たんだろう。

寂しかった。

彼が好きな女性の中で果てている時に、
僕は自分で息子を刺激して出した。

幸せな気持ちで、
女の子とピロートークをしている、
男子の隣で天井を見ながら絶望した。

正直、羨ましかった。

エッチを試してみたかった。

全部、性欲にコントロールされて、
モテる努力をしていない自分のせいだが、
どうしてもオナニーはやめられなかった。

彼の部屋の前を通ったら、
ドアが開いていたのでベッドが見えた。

「ああ、このベッドで、
彼女と愛し合ったんだなあ・・・」

と思うと興奮した。

我慢出来なかったので、
自室に戻りシコった。

結局、僕は何も変わっていなかった。

「モテたい」

「彼女が欲しい」

「エッチを試してみたい」

って思うけど、
オナニーがやめられないので、
相変わらず性欲に振り回されていた。

ヘタレ童貞でダメ人間だった。

モテないオナ猿が尻ハンターになる

こんなことを書くと、
すごく恥ずかしいが、
僕は尻フェチだ。

高校生の時はそうでもなかったが、
大学生になってから、
突然女性のお尻に目覚めた。

ケツばかりに目がいくようになった。

世の中には色々なお尻がある。

小尻、デカ尻、脂肪分たっぷりの尻、
垂れ尻、引き締まった尻、
触ると柔らかい尻、硬い尻・・・

多種多様なヒップを持つ女性が、
この世には存在する。

外に出るともはや天国だった。

沢山の女子が街中を歩いていて、
それぞれ違う尻を持っている。

尻フェチのオナ猿に、
我慢出来るはずがなかった。

ナイスボディの女性を見つけると、
すぐに後ろ姿を確認した。

視線は下半身にいき、
ヒップだけを見ていた。

「お、良いケツしてんなあ」

そう思うと速攻で息子が元気になった。

すぐに個室を探し抜いた。

さっき見たお尻が揺れている姿を想像して、
右手を上下運動した。

「あの尻を突きたい！
鷲掴みにしてパンパンしたい！」

欲望を全開にして妄想した。

頭の中はケツだけになった。

他の物事は何も考えられなかった。

女性のお尻が好きな性癖を持つと、
普段の生活が大変だった。

外出して女の子の後ろ姿を見るたびに、
下半身に目がいつてしまった。

形の良いヒップを見つけると、
狂喜乱舞した。

失礼な話だが、
顔はそんなにタイプではない女子でも、
ケツが魅力的だとオカズにした。

顔面は全く見ていなくて、
お尻にしか視線はいかなかった。

ムラムラが止まらず困った。

気付いたら、
良いヒップを探すために、
街を歩きまわる、
「尻ハンター」になっていた。

「魅力的なケツを見たいなあ」

「今日はどんな尻に出会えるんだろう」

「最高のヒップを発見したい」

そんなことを考えながら、
無駄にさまよった。

頭の中は尻だけだった。

尻、尻、尻だ。

一日中ケツのことばかり考えて、
オナニーをする、
気持ち悪い大学生になった。

しかし、尻ハンターになると、
問題が発生する。

女性だってバカじゃない。

女子は賢いので、
自分をエロ目線で、
見てくる男子はすぐに分かる。

尻を見続けると、
ほとんどの女の子は視線に気付き、
こちらに軽蔑の目を向けた。

「気持ち悪いんだよ！見てくんな！」

と言いたそうな顔だ。

僕は何度も女子から侮辱の目で見られた。

ある日いつも通り、
尻を探していたら、
形の良いケツをした、
若い女の子を見つけた。

年相応の引き締まった尻だ。

ジムに通って鍛えているのかもしれない。

即反応し彼女の背後についた。
予想通り良いヒップだった。

気付かれないようにチラチラ見ていたが、
彼女は当たり前のように察知して、
視線をこちらに向けた。

「さっきから気色悪いんだよ！
スケベな目で見てくんじゃねえ！」

と思わせるするどい目つきだった。

まるで憎悪を感じさせるほど、
怖い視線だった。

目力に威圧されたので、
すぐに立ち去った。

情けなかった。

声を掛ける勇気すらなく、
ただただ女性の尻を追いかけて、
赤の他人のケツでオナニーをした。

辛かった。

「お前はモテない」

「気持ち悪いオナ猿」

「一生シコってる」

そう言われている気がした。

これは性欲が強すぎるせいで起きた悲劇だ。

誰にだってフェチがある。

あなたにだって、
人に言えない性癖があるだろう。

タイプの女性がいるように、
好きなプレイや体位を誰しも持っている。

しかし、それを全面に出して、
異性を見るのは問題だった。

相手は当然嫌がる。

自分を性的な対象でしか、

見てもらえないのは、
女性からしても辛いだろう。

だけど、性欲に支配されると、
そんな当たり前のことすら、
気付けなくなる。

頭の中がエロのお花畑状態になるので、
女性とやれるか、やれないかでしか、
判断がつかなくなってしまう。

浅はかで残念な考えだ。

性欲をコントロール出来れば、
こんなことにはならなかった。

僕は性欲に振り回されたせいで、
大事なものを失ったと思う。

熟女のケツと女子高生のヒップを比較する

大学が夏休みに入ると、
住んでいた男子寮から、
強制的に追い出されて地元に戻った。

自宅近くの工場でバイトをしていたのだが、
30~50代の中年の男女の中に、
一際目立つ40歳の熟女がいた。

彼女はとても素晴らしい、
垂れたデカ尻をしていた。

脂肪分がたっぷりで、
重力に負けた大きなケツをしていた。

引っ叩いたらブルンブルンと、

動きそうな感じだった。

年齢に合った下半身だった。

僕の目は釘付けになった。

「あの後ろ姿は若い女の子には出せない」

「なんて素晴らしいヒップなんだ」

ただのアホだが、
本気でそんなことを考えてしまった。

それくらい熟女のケツは魅力的だった。

仕事中にチラチラ見て目に焼き付けておき、
自宅に帰ったら思い出してオナニーをした。

オカズにはぴったりだった。

尻フェチからすると、
とても良いネタになった。

しかも熟女は、
パンティラインが、
見える機会が頻繁にあった。

尻がデカ過ぎるゆえに、
履いたジーンズがピチピチになるので、
下着のラインが思いっきり透けていた。

遠くから見ても、
はっきり分かるくらいだった。

大きい尻にモロ見えのパンティライン。

ケツ好きな人間からしたら、
たまらないだろう。

チラ見する回数が増加した。

思わず「ゴク」っと唾を飲むほど、
エロい後ろ姿をしていた。

失礼だが顔は全く見なかった。

ヒップにしか視線はいかず、
幾度となくオカズにした。

彼女の下半身は凄かった。

フェチが違う男性からすると、
理解不能だが、
ケツ好きにはたまらなかった。

またこの時、短期間だが、
18歳の女子高生がバイト先に入ってきた。

僕は工場の面接時に、
女子高生と一緒にだったが、
その子とは別の女の子だ。

後から入ってきたらしい。

彼女は素晴らしい小尻をしていた。

10代で若いので無駄な脂肪が一切無い、
プリプリのケツだった。

一瞬で魅了された。

当然ながらオカズにした。

小さい尻が小刻みに揺れる姿を想像して、
オナニーした。

気持ち良くて仕方なかった。

片方は熟女のデカ尻。

もう一方は女子高生の引き締まったヒップ。

毎日バイト先に行くたびに2人の後ろ姿を、
確認するのが日課になった。

まるで鑑定士のように比較して、
「今日はどちらで抜こうかな～」

とバイト中に考えて、
自宅に戻ってからシコった。

そんな日々を繰り返した。

もはや工場に、
お金を稼ぐために行くのではなく、
2人のケツを見に行っている、
ようなものだった。

だけど、話し掛ける勇気はなかった。

オナニーばかりのモテない男子が、
相手にされるなんて思えなかった。

正直、10代の女の子と、
知り合いになりたかった。

休憩時間に一緒にご飯を食べながら、
色んな話をしたかった。

あわよくば一回くらい、
デートをしたかったが全て夢で終わった。

声を掛けられないまま月日は過ぎ、
夏休みが終了したので、
バイトを辞めて寮に戻った。

結局、女子高生とは一言も話せなかった。

妄想を現実にすることは出来なかった。

トイレオナニー事件3選

僕は大学在学中にトイレ関係で、
恥ずかしい思い出が3つある。

どれもオナニーに関することだ。

一度目は服屋に行った時だった。

大学には母親が買ってきた、
服を着て通学していた。

服屋の店員さんが、
ファッションモンスターに見えたので、
怖くて近寄れなかった。

オナニーのせいで自信が無かったので、
リア充臭がするアパレル店員とは、
関われなかった。

しかし、いつも着ていた服が、
ボロボロになったので、
買わざるおえなくなった。

母も自分で買いに行けというので、
仕方なく誰もが知っている、
ブランドのお店に行った。

「早く帰りたいなあ」

と思いつつ入店後、
一目散に必要な服を探した。

その時、たまたまスタイルの良い女性を、
見つけてしまった。

後ろ姿を見たのだが、

美脚やお尻がとても魅力的だった。

エロレーダーが反応したので、
すぐさまトイレに直行した。

我慢が出来なかった。

あの体を抱きたくて仕方なかった。

ハアハア言いながら思う存分、
右手を上下運動した。

オナニーに夢中になり、
射精感がこみ上げてきた頃、

「コンコン！コンコン！」

突然、トイレがノックされた。

「え？何だろう？」

そう思った次の瞬間、

「お客様！大丈夫ですか！
どうされました！？大丈夫ですか！」

店員さんの叫び声が聞こえた。

「え？え？何？どういうこと？」

わけがわからず、
すぐにパンツとズボンを履いて、
トイレから出た。

外に出ると、
他のお客さんが行列を作っていた。

「トイレがずっと使えないと、
他のお客様から言われたんですが、
何かありましたか？」

どうやら僕はオナニーに集中し過ぎて、
トイレに20分くらい入っていたらしい。

それを不審に思った他のお客さんが、
店員さんに通報したみたいだ。

店員のお姉さんは困った顔をしていて、
他のお客さんは、
「早くしろよ」「いつまで入ってんだよ」
と言いたげな視線を向けた。

「あ．．．えっと、何でもないです、
すみません．．．」

すぐに謝罪して服は買わずに、
お店から逃げた。

恥ずかしくて仕方なかった。

まさかオナニーをしていたなんて、
言えるわけがなかった。

自分でも何をしているんだろうと思った。

性欲に支配されなければ、
こんな恥ずかしい経験を、
しなくてすんだのに．．．

自分が大嫌いになった。

次は多目的トイレで、
オナニーをしていた時だった。

ちょうど男子トイレの個室が、
全部埋まっていた。

しかし、どうしてもシコリたかった。

「ああ！我慢出来ない！」

そう思っていたら、
多目的トイレが、
空いているのに気付いた。

誰も使っていないし良いかなと考えて、

軽い気持ちで中に入った。

速攻でシコった。

とても気持ち良かった。

しばらくして精神が落ち着いてきたので、
身なりを整えて外に出た。

すると、そこに子供連れのお母さんがいた。

ベビーカーを引いていて、
身なりが派手なギャルママだった。

彼女は僕を見ると、
近付いてきてこう言い放った。

「こっちは待ってるんだからさ！
長いよ！早くしてよ！」

「あ．．．す、すみません．．．」

突然怒鳴られたので驚いた。
けれど、僕の方が悪いのですぐに謝った。

ギャルママは怒った表情で、
子供を連れてトイレに入ってしまった。

とても恥ずかしかった。
情けなかった。

「俺、何やってるんだろう．．．」

自己嫌悪になった。

最後はコンビニのトイレだ。

用事があって外出している時だった。

街を歩いていたら、
スタイル抜群の女の子を見つけた。

「うわあ、ヤバイなあの子、良い体してる」

すぐに息子が元気になった。

我慢出来なかったので、
シコる場所を探していたら、
コンビニを発見した。

「よし、あそこにしよう」

コンビニに入りトイレに直行した。

既に息子の先端からは、
少し液体が出ていた。

体が「早く出せ」と、
命令しているようだった。

僕はさっき見た女性を思い出しながら、
右手を上下運動した。

数十分後、無事発射した。

気持ち良かった。

お決まりの賢者タイムがきたので、
個室でぼーっとしていた。

しばらくしたら気持ちが落ち着いたので、
後処理をしてトイレから出た。

ドアを開けると、
近くに20歳くらいの女子が1人立っていた。

服装から女子大生に見えた。

トイレが空くののを待っていたらしい。

僕が出ると彼女はすぐに、
トイレに入ってしまった。

僕は手を洗い、
何となく雑誌コーナーで、
パラパラ雑誌を見ていた。

数分後、トイレから女の子が出てきた。

その時、友達だと思われる、
もう1人の女子大生が、
雑誌コーナーにいた。

2人は何やらこそこそ話し始めた。

「ねえ、ちょっと聞いてよ、
さっきトイレに入ったんだけどさ」

「うん、それで？」

「なんか・・・
変な匂いがしたんだよね・・・」

「え？何それ？」

「イカ臭いっていうか、

絶対あれやった後だと思う」

「うわあ、マジ最悪じゃん」

「ほんとだよ、
私の前に若い男が入っていたから、
あの人じゃないかなと思うんだよね」

「コンビニのトイレでするとか、
気持ち悪いね」

「ありえないよね。気持ち悪いよ」

「次に使う人の気持ちを考えてよね」

知らないフリをしていたが、
明らかに僕のことを、
言っているのが分かった。

2人は話しながら、
チラチラこちらを見ていた。

まるで、

「トイレでオナニーするな」

「シコるなら自宅でやれ」

「お前、気持ち悪いんだよ」

「オナ猿はほんとモテないね」

そんな言葉を投げかけられている気がした。

傷ついた。

辛かった。

しかし、僕は彼女に対して、失礼な行為をした。

嫌われるのは当たり前だし、気持ち悪いと思うのは当然だった。

女性大生2人の会話や、視線に耐えられず、逃げるようにコンビニから去った。

外に出ると、雲ひとつない晴天だった。空を見上げると眩しかった。

僕の気持ちは暗黒だった。

「はあ、俺は何をしているんだろう・・・」

自己嫌悪になった。

全て自分が悪い。

女子大生達が正しいのは明らかだ。

見知らぬ男がシコった後の、
トイレに入りたい女性なんて、
存在しない。

そういう性癖がある人なら、
興奮するかもしれないが、
正常な女の子だったら気持ち悪がられる。

彼女達は生ゴミを見るような目線で、
こちらを見ていた。

それくらい僕がした行為はおかしいことだ。

反省した。

申し訳ないと心の中で何度も謝罪した。

どうしようもない男だと自分を責めた。

もしも性欲を、
上手くコントロール出来ていたら、
こんな悲劇は起きなかった。

自分を高めるために努力し魅力を磨いて、
素敵な女性と楽しい時間を過ごせたと思う。

だけど、僕はそれをしなかった。

目先の快楽に身をゆだね、
性欲に支配されて、
エロとオナニー漬けの生活を送った。

射精の瞬間は最高に気持ち良かった。

オナニーをすると、
モテないストレスを発散出来た。

でも、すればするほど、
ムラムラが止まらなくなった。

シコるのがやめられなくなった。

そのせいで起きたのが、
今回の事件だ。

20代の大学生で、
トイレに関する失敗談が、
3つもある。

恥ずかしくて仕方なかった。

どの場面でも、
女性から軽蔑した目で見られ、
侮辱した視線を向けられた。

自分に存在価値がないように感じた。

モテない男子のレットテルを、
これでもかと貼られた。

辛かった。
苦しかった。
虚しかった。
寂しかった。

全て自己責任だが、
性欲に操られて欲望まみれになった先に、
待っていたのは地獄だった。

女性から全否定される人生だった。

男性からしたら厳しすぎるだろう。

異性から必要とされないだけでなく、
存在すら認めてもらえない。

何のために生きているのか？

分からなくなった。

オナニーとの決別

モテない毎日に絶望していたある日、
オナ禁の存在を知った。

「オナニーをやめる」

性欲にコントロールされて、
シコリまくっていた大学生には、
理解し難い行為だった。

「あんなに気持ちの良い、
オナニーを断つ・・・」

想像が出来なかった。

息子の上下運動を繰り返した右手には、
愛着があったから、
オナ禁をするということは、
恋人と縁を切るようなものだった。

しかし、性欲に支配されない世界に、
行ってみたかった。

まだ、オナニーを覚える前の、
小学校、中学校、高校時代の前半は、
性に目覚めてはいなかったので、
恋愛面は良い思い出がないが、
それなりに楽しい日々だった。

中学では部活動が大変だったが、
高校1~2年と3年の前半は全盛期だった。

青春を謳歌した。

一心不乱にスポーツに力を注ぎ、
心から楽しい毎日を送った。

オナニーとおさらばしたら、
輝いていた頃の自分に、
戻れるかもしれない・・・

そんな淡い期待を抱いた。

僕は右手と決別した。

今まで何度も息子を刺激する役割を担った、
右手を引退させた。

エロ動画やエロ画像、
エロ系の課金サイトとバイバイした。

お気に入りのオカズを消す時は躊躇した。

「この動画、何度も抜いたんだよな・・・」

何時間もかけて探した、
至高の一品だ。

アホな話だが、
ものすごい情熱をかけて、
ネットを駆使して見つけた作品だった。

自分が興奮するポイントを全て抑えていて、
出演している女性はとてもタイプだった。

「彼女にするなら絶対この人！」

そう叫びたくなる女子だ。

だが、勇気を出してデリートした。

性欲に振り回されない、
新しい世界に行くために、
多くの誘惑を捨てた。

全部捨てると晴れやかな気持ちになった。

まるで刑務所から出てきた、
囚人のような気分だった。

でも、本番はここからだ。

「オナ禁でエロやオナニー、
性欲にコントロールされない世界に行く」

僕のオナ禁生活が始まり、
一度目は10日のオナニー断ちに成功した。

右手は再デビューしてしまった。

「久しぶりだね」

なんて言葉が聞こえてくるような気がした。

だけど、すぐにオナニーを封印した。

10日続いたことで、
身体や精神にすごく変化が出た。

寝起きや顔つきが良くなり、
抜け毛が減ってやる気が上がった。

シコらない生活になったので、
今までエロとオナニーに、
浪費していた時間が無くなり、
暇になった。

ちょうど就活の時期だったので、
会社訪問をしたり面接を受けたり、
企業説明会に参加した。

授業がある時は学校に行き、
就活で知り合った、
リクスー女子を口説きつつ、
恋愛について学びながら、
ひたすら自分磨きをした。

オナ禁で性欲の支配から抜け出す

数ヶ月後、オナ禁日数120日を達成した。

4ヶ月間、右手は僕を、
昇天させるためではなく、
他の物事に使い、
成長させてくれるものになった。

肉体面と心の面で異常な変化があり、
別人になった。

自信がつき、
性欲に支配される生活から抜け出せた。

尻ハンターを卒業して、
女性を1人の人間として、
見れるようになった。

「これは・・・スゴイ！」

秘めたオナ禁の力にビックリした。

性欲にコントロールされて、
女性のケツばかり追いかけていた、
ヘタレ童貞はもういなかった。

自信があって堂々としていて、
顔つきや目つきや雰囲気が変わり、
女の子と普通に話せる、
大学生になっていた。

そのままの勢いで女子を口説きまくり、
20歳の彼女が出来た。

可愛くて性格がすごく良い女性だった。

ちゃんと仕事をしていて、
お金を結構持っていた。

良識がある知的な女の子だった。

デートを漫喫した。

彼女と手を繋いで街を歩き、
カフェで何時間も雑談したり、
オシャレなお店で食事をしたり、
カラオケでデュエットしたり、
イチャイチャしながらお散歩したり、
海を見ながら語り合ったりして、
どこにでもいるカップルのように、
ラブラブな毎日を過ごした。

水族館、テーマパーク、
観覧車、プラネタリウム等の、
デートスポットに2人で行った。

好きな女子と一緒にいられるのは、
最高だった。

お泊まりデートをしたこともあった。

彼女の仕事の関係で、
1泊2日だったが、
色々な所に出掛けて、
素晴らしい思い出を作った。

付き合っただけでしばらく経ってから、
彼女とエッチをして童貞を卒業した。

22歳。

かなり遅い初体験だ。

でも、大好きな女性と、
一つになれたのは、
すごく嬉しかった。

彼女の中で果てると、
幸せな気持ちになった。

「このまま死んでも悔いはない」

そんなことを考えるくらい、
至福の時だった。

「オナ禁を頑張って本当に良かった」

心からそう思えた。

性欲に振り回されていた時は、
まさか自分に彼女が出来るなんて、
想像出来なかった。

右手が恋人で、
オナニーとエロ動画が友達の、
さえない男子に、
「好きだよ」と言ってくれる女子は、
存在しなかった。

いるのは尻ハンターに対して、

「気持ち悪いんだよ！
チラチラ見てんじゃねえよ！」

と言いたげな目をしてくる女性だけだった。

自分の生きる意味が見出せなかった。

存在価値を感じなかった。

だけど、今は生きていて良かった思う。

人生が最高に楽しいと胸を張って言える。

素敵な彼女がいて、
オナニーで失った自信を取り戻して、

毎日笑顔で生活が出来る。

幸せだった。

性欲に操られて、
女性をスケベな目でしか見れない、
僕はもういなかった。

オナ禁をやって本当に良かった。

エピローグ：オナ禁の本質は 性欲のコントロール

正直、エロやオナニー、
性欲にコントロールされる世界には、
二度と戻りたくはない。

あの場所は地獄だ。

男性をどんどんダメにして、
まるで底無し沼のように、
抜け出せなくする。

その先に待っているのは絶望だ。

女性から愛されず彼女がいなくて、
エロ動画とスマホと右手（左手）が恋人の、
寂しい生活を一生送ることになる。

自己嫌悪が止まらず、
自信をどんどん奪われ、
気付いたら性欲にまみれて、
シコるしか楽しみが無くなってしまう。

あなたにはそこから、
絶対に抜け出して欲しい。

性欲を自分磨きに使い、
魅力的な男性になって、
素敵な女性と幸せになって欲しい。

これは僕の想いだ。

僕自身が性欲に心を支配されたせいで、
色んなものを失った。

若い時の貴重な時間や体力、
希望、夢等を奪われた。

もしも性欲に支配されていなかったら、
もっと早く素敵な彼女が出来て、
沢山の思い出を作り、
充実した日々を送っていたと思う。

あなたは僕と同じようになってはいけない。

性欲に振り回されて、
ぶっかけるのに時間を使ったり、
シコシコダッシュをやるうとしたり、

パンツを見るために必死になったり、
尻ハンターになって、
女性のケツを追っかけたり、
熟女のケツと、
女子高生のヒップを比較したり、
トイレでオナニーをして、
恥ずかしい思いをしたり、
シコりまくって、
エロいことしか考えられなくなったりして、
一度きりの人生を無駄にしてはいけない。

オナ禁の本質は性欲のコントロールだ。

あなたの持っている性欲を、
上手に管理する。

これがオナ禁の本質だ。

良い方向に使えば、
人生を充実させられるが、
悪い方向に使えば、
あなたを破滅させるほどの力がある。

それだけ強大なパワーになるのが、
性欲なんだ。

だから、あなたはオナニーを禁止して、
性欲を自分の人生を良くするために、
使って欲しい。

日々何となく射精を繰り返して、
惰性で生きていくのは、
もったいなさ過ぎる。

強い性欲は使い方次第で、

あなたを別人にするくらいの力がある。

特に若い時は、
性欲が無尽蔵にあるから、
コントロール出来れば、
どこまでも自分を成長させられるし、
努力すれば魅力的な男に変われるので、
女性にモテやすくなる。

全てはあなた次第だ。

行動の源になる性欲を、
どうか無駄にしないで欲しい。

ここまで僕の失敗談を通して、
あなたに性欲に支配されるのが、

いかに危険なのかを伝えてきた。

エロやオナニーに依存するのは、
本当に危ない。

抜け出せなくなる可能性がある。

そこに希望は無い。

絶望しかない世界だ。

あなたが本当に欲しいものは、
何一つ手に入らない。

だからこそ、
あなたはオナ禁を通して、
理想を実現するべきだ。

心から叶えたい夢を現実にするために、
一歩ずつでも前進して欲しい。

あなたがオナニーをやめ、
エロや性欲の支配から脱獄して、
素敵な彼女と人生を楽しんでくれたら、
僕は嬉しい。

最後までお読み頂き、
ありがとうございました。

山下

【追伸】 限定プレゼントのお知らせ

もし良ければ、
以下のアンケートに答えて下さい。
→<https://my78p.com/p/r/3MxQfkBu>

アンケートに回答してくれた人限定で、
プレゼントを用意しました。

書いてくれた方には、
僕からセミナー動画を送っています。

内容はオナ禁が続く人だけが、
知っている5つのポイントです。

僕自身がオナ禁を実践したり、

周囲のオナ禁をしている人に聞いた中で、
オナ禁が続く人には、
特徴があることが分かりました。

それを5つのポイントに分けて、
解説した動画となります。

これを知っているだけで、
オナ禁が続けやすくなります。

アンケート自体はたった2~3分で終わる、
簡単な内容になっているので、

すぐに回答して、
プレゼントをゲットしておきましょう。

それでは動画内で、
あなたに会えるのを楽しみにしています。
→<https://my78p.com/p/r/3MxQfkBu>

【著者プロフィール】 山下亮一

高校生の頃にオナニーを覚えてから、
毎日自慰行為に励んだ結果、
身体、精神に異常をきたし自信を無くす。

大学入学後もオナニーがやめられず、
依存症になり童貞を笑われ絶望する。

「ヘタレ童貞」「オナ猿」「自信0」の、
ダメ人間化し女性にはモテず、
孤独感には押し潰され自殺を考える。

オナニーで人生が壊れた状態になったが、
たまたま知ったオナ禁が転機となり、
人生が逆転。

20歳の彼女で童貞卒業したり、
モテるようになりデートしまくったり、
上場企業から内定が出たりと、
今までとは正反対の、

楽しい毎日を送れるようになる。

この経験を活かして、
現在はオナ禁モテ大学生として、
過去の自分と同じように、
オナ猿化して苦しんでいる大学生に向けて、
オナ禁で自信を取り戻し、
強くて魅力的な男性になり、
人生を楽しむための情報発信をしている。

ブログ:<https://yamashita01.com>

Twitter:<https://twitter.com/yamashita013>

YouTubeチャンネル:<https://www.youtube.com/channel/UCMuQPxeHGfX5WpALvjDVJQQ>

LINE:<https://lin.ee/eliF3Km>